

笠間城跡表採の瓦について

齋藤 徳之・比毛 君男

はじめに

茨城県笠間市の笠間城は、慶長3(1598)年に入部した蒲生氏以降近世城郭に改修されたといわれている。山城でありながら幕末まで機能した全国的にも希少な近世城郭として市指定史跡であり、織豊系城郭の三要素と定義されている「石垣、礎石建物、瓦」は現在も遺存している(図1~3)。



図1 天守曲輪石垣



図2 本丸宍ヶ崎櫓跡礎石



図3 移築現存(八幡台)櫓【県指定】

平成25(2013)年より笠間城跡保存整備調査事業が進められる一方、平成23(2011)年の震災以降、図1の天守曲輪の石垣は崩落の危険があり、笠間城の廃材を利用したとされる天守曲輪内の現佐志能神社や周囲の瓦塀も現状維持が困難な状態となっている。

この状況を憂慮した筆者は、貴重な史料の散逸を防ぎ今後の調査研究に資することを目的として、城域に散乱する古瓦のうち、特に資料性が高いと判断したものを表採し、ここに報告することとした。

今回報告する資料は、近世瓦に共通する様相や、水戸城や土浦城など近隣の近世城郭でも見られる瓦当文様や刻印瓦など瓦の生産・流通をも考察できる可能性があり、今後の笠間城研究の一助となれば幸いである。執筆は、「はじめに」と1を齋藤、2と「おわりに」を比毛及び齋藤で分担した。

1. 瓦の表採地点について

図4に笠間城跡の縄張図を示す。古瓦の表採は近世城郭エリアである天守曲輪跡や本丸跡周辺で行った。各遺物の表採位置の詳細を図5に示す。先述の通り、天守曲輪内の現佐志能神社や周囲の瓦塀に笠間城の廃材が利用されたとされ、確かに天守曲輪周囲の傾斜地で多く表採された。また、その後の調査では本丸跡西端の宍ヶ崎櫓跡周囲の傾斜地でも表採される例が多く、城内に散乱した瓦礫が近現代の城跡公園整備の際にこの周囲に集積された可能性も考えられる。

つまり、今次報告の表採位置と当時の城内の瓦葺き建物配置を関連付けて議論するには、発掘調査等による検証が必要なため、現状では慎重に判断すべきと考えている。尚、遺跡の現状変更が発生しないよう掘削などは全く行っていない。採取対象は地表面から視認できて資料の状態が良いものに限定した。採取は草木が枯れ、表出した瓦が視認しやすい冬期に行った(採取日 2022年1月23日)。

※本稿は茨城城郭サミット(県央・県西編、2024.2.10)にて紙上報告した原稿に写真図(1,2,3,9,10)を加え編集したものです(2024.2.11、齋藤徳之)

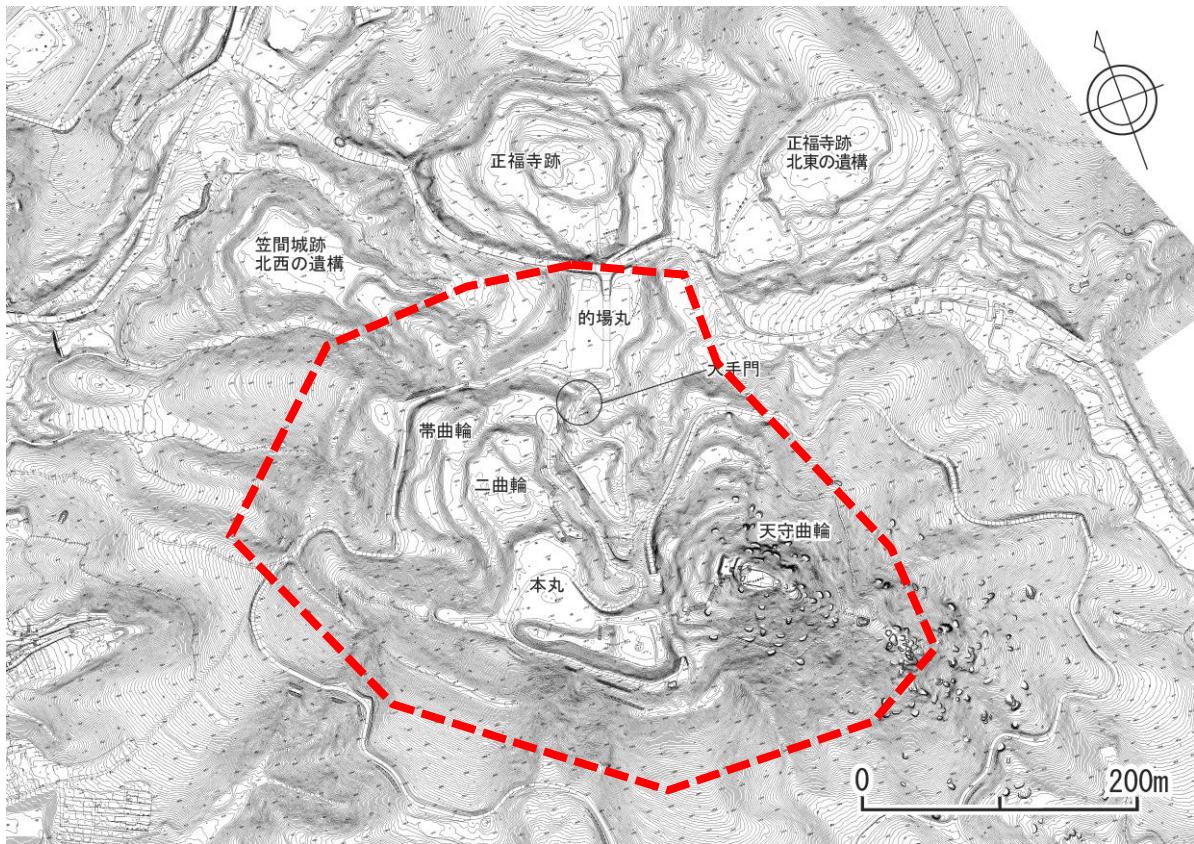


図4 笠間城跡 航空測量図(破線内が近世城郭エリア)

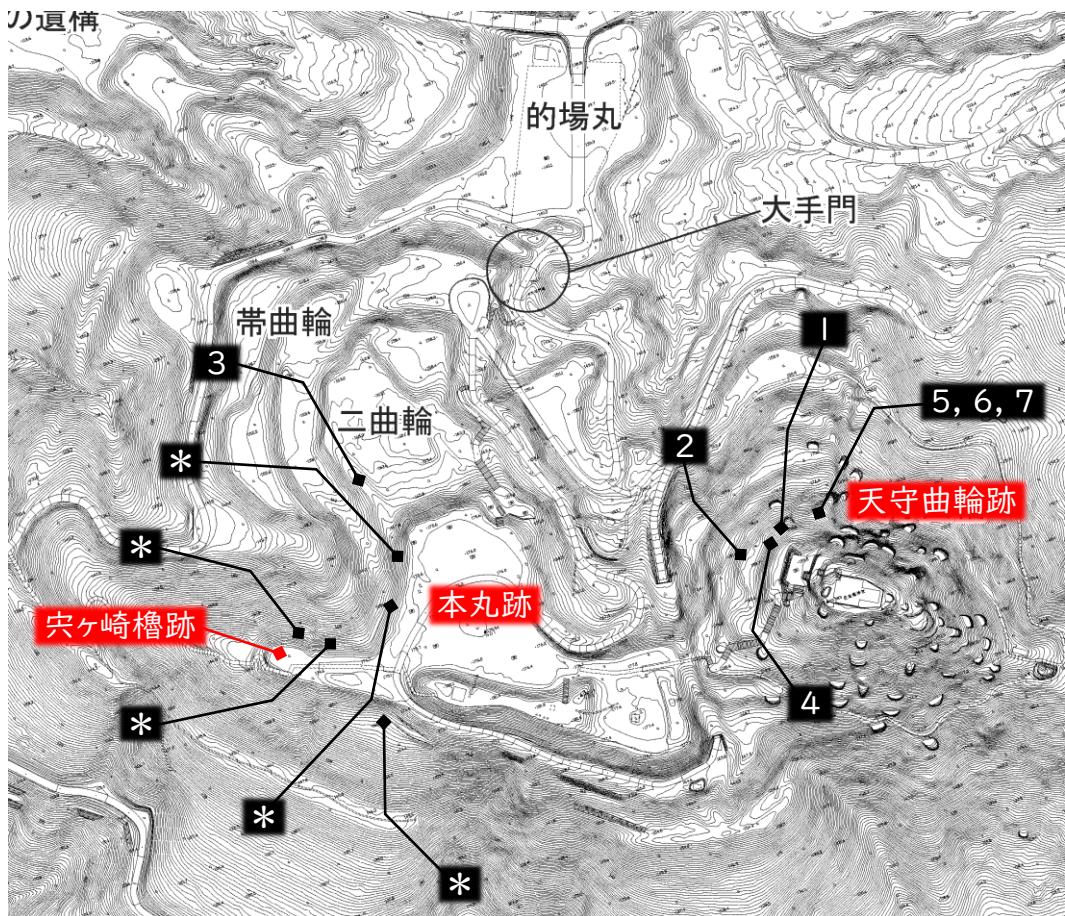


図5 古瓦表採位置

図中の番号は図6,7,8 の資料番号に対応。*印はその他の表採瓦採取位置。

2. 笠間城跡表採瓦について

当章では前章を踏まえ、以下に笠間城跡表採瓦を図と表により報告する。図化は比毛が行い、観察表は齋藤と比毛が共同で作成した。

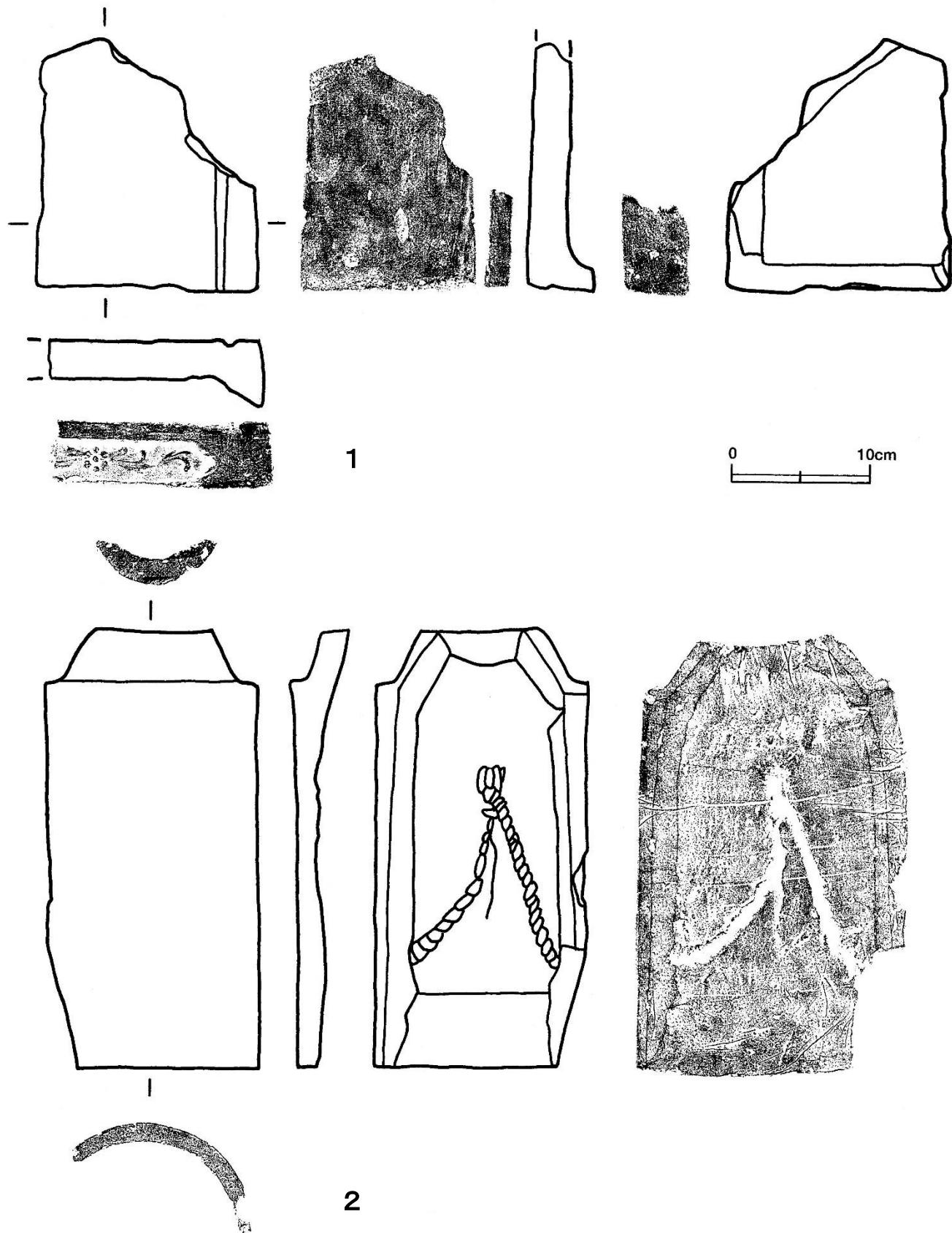
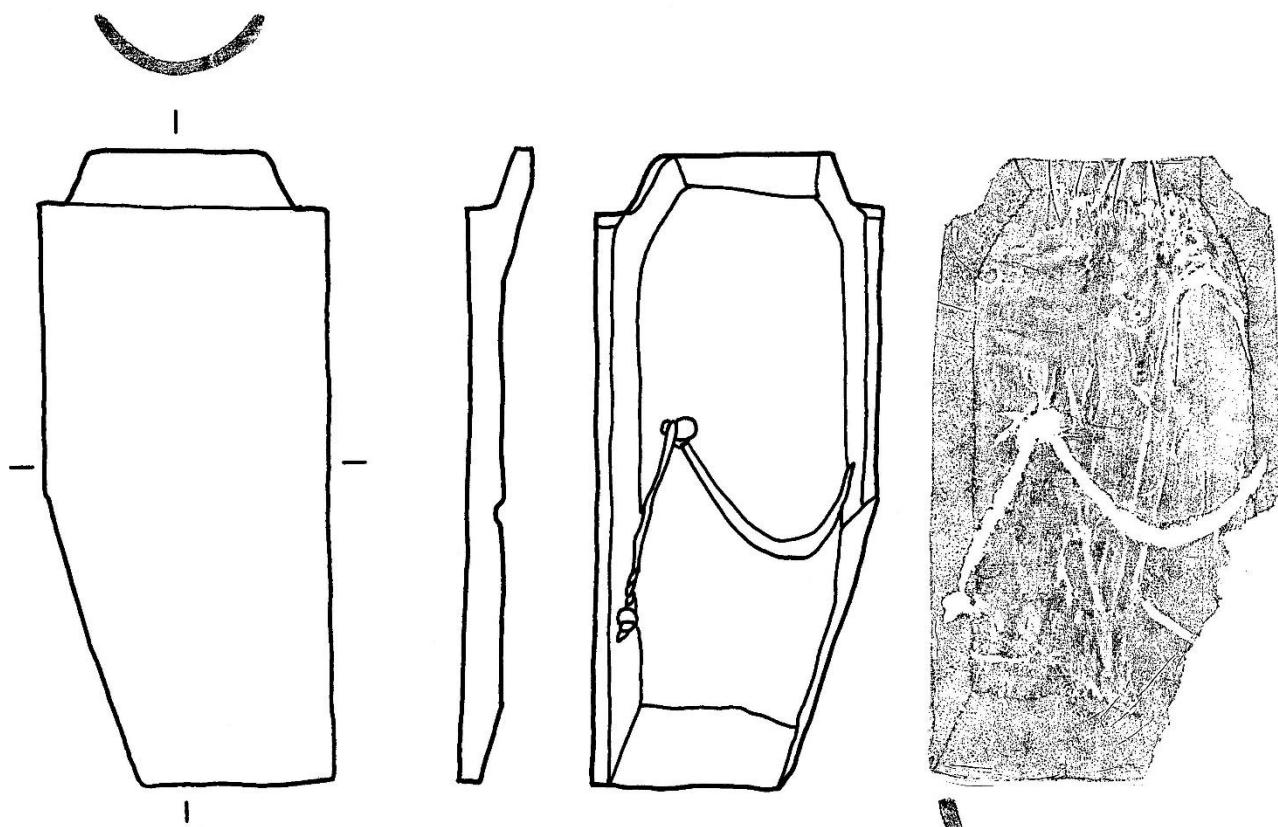
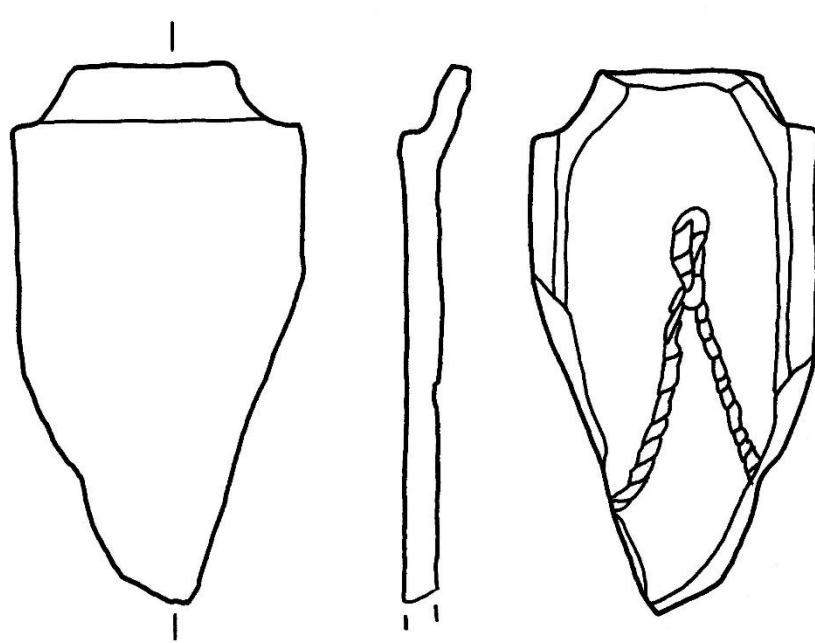


図 6 笠間城跡表採瓦(1)



0 10cm

3



4

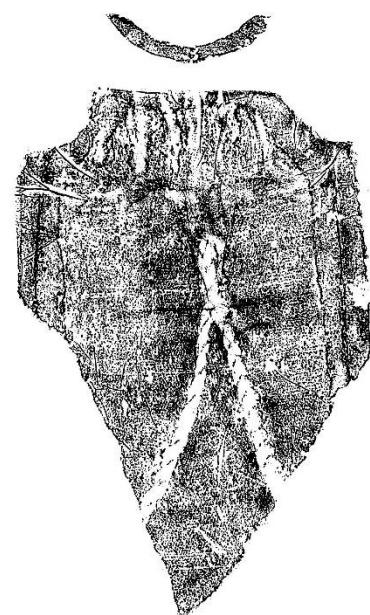
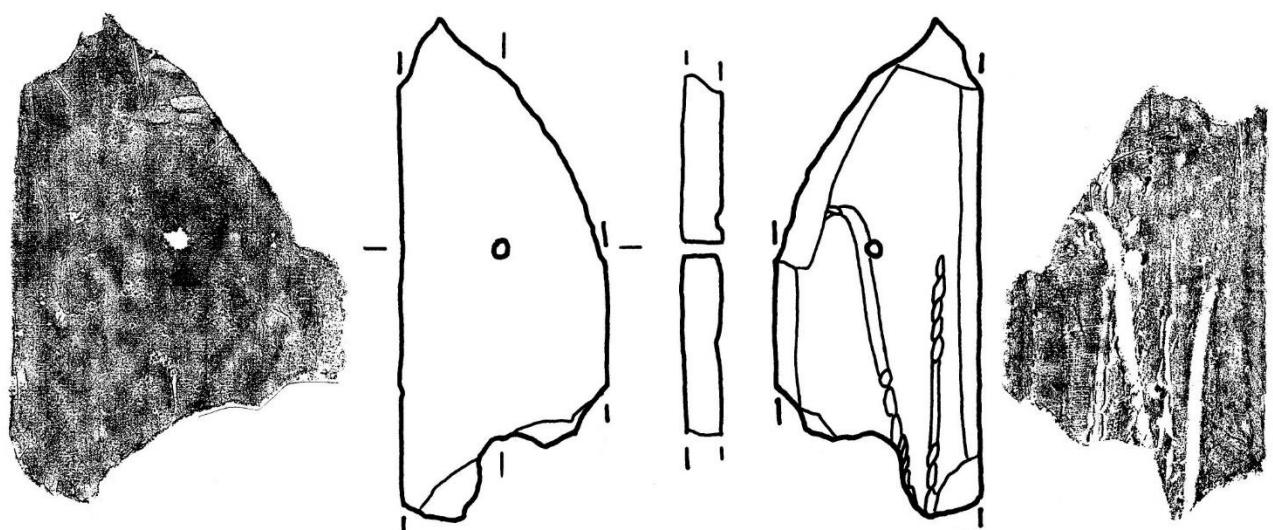
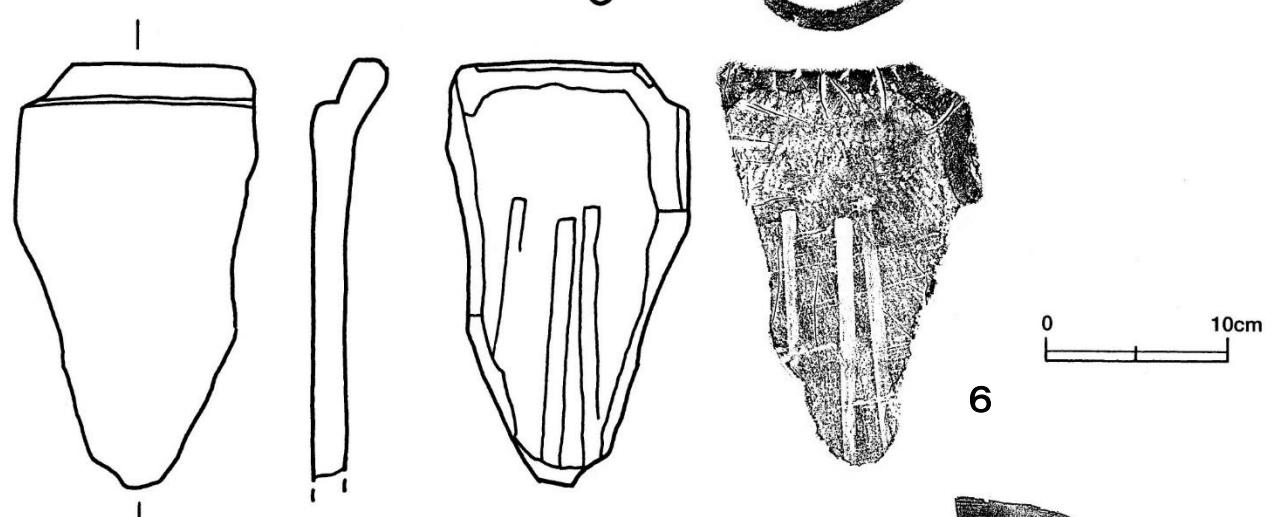


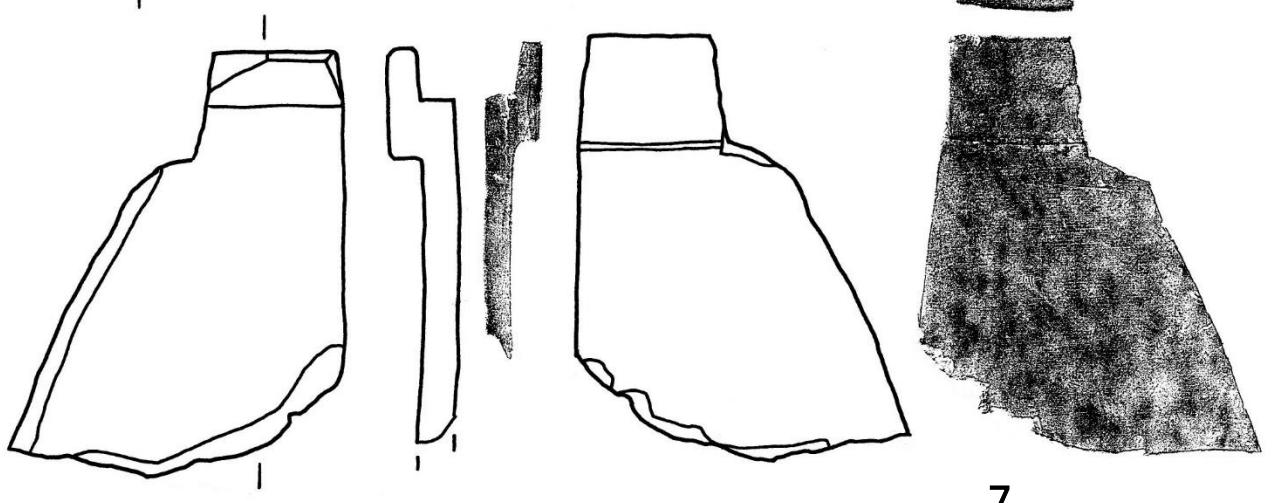
図7 笠間城跡表採瓦(2)



5



6



7

図 8 笠間城跡表採瓦(3)

表1 笠間城跡表採瓦

資料番号	種別	資料の特徴	表採地点
図6-1	板扉瓦	瓦当文様は七曜文の中心飾りから左右に二葉一組の唐草文が二転する。凸面に水切り溝。表面は丁寧なナデ。	天守曲輪 北西側斜面
図6-2	丸瓦	筒部右端を欠く他はほぼ完形。凹面は布目痕を僅かに残し、コビキ痕が全面に残る。吊紐痕あり。側縁の面取りは二面。凸面縦方向のヘラ削り。	天守曲輪 西側腰曲輪
図7-3	丸瓦	筒部右側を欠く他はほぼ完形。凹面は布目痕を残し、コビキ痕が全面に残る。吊紐痕あり。側面面取り。	二の丸 西側土塁上
図7-4	丸瓦	玉縁から筒部中央の破片。凹面は布目痕を僅かに残し、コビキ痕が全面に残る。吊紐痕あり。側面の面取りは二面。	天守曲輪 西側腰曲輪
図8-5	丸瓦	小ぶりな筒部片。中央に釘穴。凹面に布目痕・コビキ痕、吊紐痕あり。	天守曲輪 北西側斜面
図8-6	丸瓦	玉縁から筒部中央にかけての破片。凹面はコビキ痕の上に、浅い内叩き痕が3条残る。玉縁寄りには蓮状の圧痕あり。	天守曲輪 北西側斜面
図8-7	板棟瓦	全面を丁寧にナデ、側面は僅かに屈曲する。	天守曲輪 北西側斜面

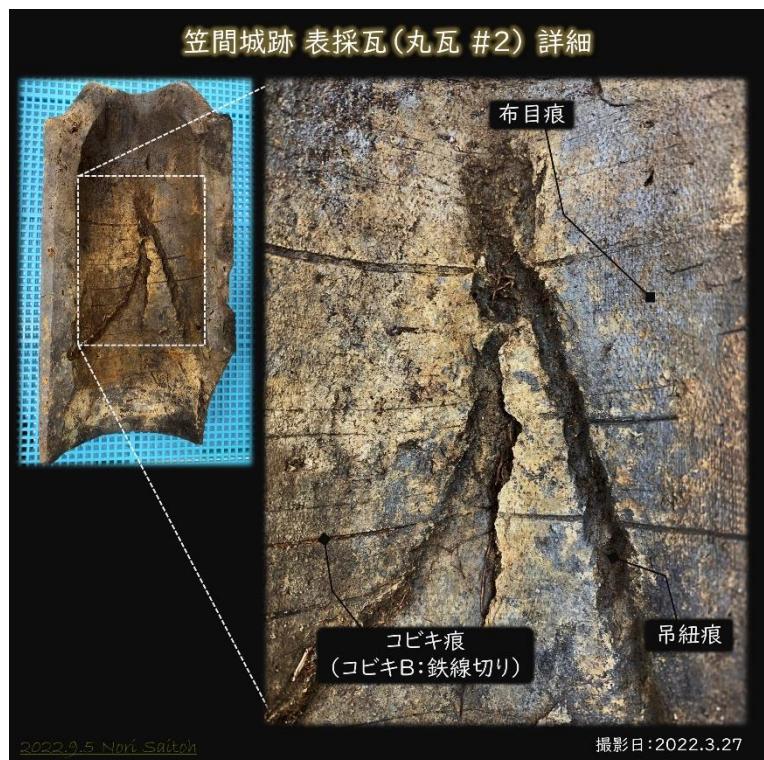


図10 丸瓦内面の痕跡[資料2を拡大]

図9 表採時の状況[上は資料1、下図は資料5~7に対応]

おわりに

関東地方における幕藩体制下で、笠間城のような山城が近世を通じて維持された類例は下野国烏山城のみである。烏山城は、八溝山地鷺子山塊内の那珂川と荒川に挟まれた喜連川丘陵に位置し、丘陵頂部に古本丸(中世の主郭)と本丸を配し、石垣遺構を有している。17世紀後半に丘陵東側山麓に三の丸を造営して以後は、三の丸が藩政の中心となった。烏山城本丸・古本丸の確認調査では、平瓦を中心とする瓦の出土が報告されているが、詳細は不詳である。

平地に囲まれた独立丘陵上に営まれた佐野城は、近世初期に時期が限定できる好例である。築城が慶長7年(1602)、佐野氏の改易が同19年(1614)である。筆者のうち齋藤は、佐野城跡出土瓦を実見し、丸瓦にコビキ痕と吊紐痕が残るのを確認している。

上野国沼田城は、天文元年(1532)年沼田氏の居城として整備され、後に真田氏が城主となる。天和元年(1681)に沼田藩は改易され、翌年に城は破却されている。沼田城跡出土の丸瓦は、凹面に布目痕はあるものの吊紐痕は確認されていない(2022年5月の調査成果報告会にて齋藤が確認)。

常陸国では、土浦城本丸土壘整備に伴う調査で板塀瓦が出土している。瓦には、19世紀に土浦藩の瓦師となる「前澤」の印が押されている。水戸城では、県立水戸三高内(旧二の丸御殿)の発掘調査で17世紀中葉から18世紀の板塀瓦などが出土地している。また笠間市内では、宍戸城跡の数次の発掘調査で慶長7年(1602)から正保2年(1645)までの秋田氏藩政下における城下町遺構が調査され、概期の近世瓦が出土している。

奈良斑鳩の法隆寺昭和資材帳作成に伴う瓦調査によると、丸瓦凹面の吊紐痕は17世紀まで確認され、それ以後は消失する。棒状の内叩き痕は18世紀までは確認されている。

上記を踏まえて当報告の瓦群を比較すると、笠間城跡天守曲輪出土丸瓦の多くに布目痕・コビキ痕・吊紐痕を有しているものが見られる。これらの特徴は概ね17世紀代のものと考えられる。瓦は天守曲輪の建造物に使用されていた可能性が高いが、近代以後の佐志能神社建築時にも建築資材の移動はあると想定されるため、現段階で詳細を明らかにすることはできない。今後も関東地方における近世城郭の出土瓦の類例を更に調べ、笠間城跡出土瓦の検討を加えてゆきたい。

なお当報告で掲載された資料は、今後笠間市教育委員会に託す予定である。

主要参考文献【敬称略、50音順】

笠間市教育委員会『笠間城跡保存整備基礎調査報告書』2014年

小林謙一・佐川正敏「調査報告1 法隆寺出土古瓦の調査速報(2) 平安時代～近世の軒丸瓦」『伊珂留我 法隆寺昭和資材帳調査概報10』

公益財団法人茨城県教育財団『文化財調査報告396集 水戸城跡』2015年

財団法人茨城県教育財団『文化財調査報告362集 水戸城跡』2012年

佐野市教育委員会『佐野城跡(春日岡城)V』2009年

土浦市教育委員会『土浦城址発掘調査報告書』1989年

土浦市教育委員会『史跡 土浦城跡』2002年

土浦市教育委員会『史跡 土浦城跡II』2004年

那須烏山市教育委員会『烏山城跡確認調査概報』2014年

沼田市教育委員会『沼田城跡 発掘調査報告書』2001年

沼田市教育委員会『沼田城跡2 発掘調査報告書』2019年

有吉重蔵編集『考古調査ハンドブック18 古瓦の考古学』2018年 ニューサイエンス社